

【研究論文】

大学生が考える待遇表現とは 筆記試験での解答例による分析と考察

清島 絵利子

岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

2019年度前学期から、全学共通教育の人文科学科目「日本語表現論（実用的な日本語表現を学ぶ）」を開講し、特に、「待遇表現（敬語を含む）」の修得と解説に重点を置いている。今回は過去3回の筆記試験での解答例をもとに、学生の修得状況や誤答の傾向について分析と考察を行った。その結果、敬語に関しては、相手に失礼がないように二重三重に敬語を使用する傾向が見られた。また、様々な場面や相手に配慮できるかどうかに関しては、敬語の使い方の正誤の判断はできるが、場面や状況、相手の立場に沿った適切な表現に直すことが苦手であった。今後の授業においては学生の弱点を補うため、さらに、演習の時間を増やす必要があると考えている。

キーワード：待遇表現，敬語，筆記試験，誤用分析，大学生

1. はじめに

2019年4月に筆者が岐阜大学に赴任して1年半、自らの専門分野と企業にて社員研修を担当していた経験を活かし、全学共通教育科目の人文科学科目の1つとして「日本語表現論（実用的な日本語表現を学ぶ）」を開講している。授業は、次の4項目を到達すべき目標として掲げて実施している。

目標

1. 基本的な文章が正しく作成できる日本語表現力を身に付ける。
2. 場面や状況に応じて、適切なコミュニケーションをとれる能力を身に付ける。
3. 良好な人間関係を基盤とする社会生活ができるための実践力を身に付ける。
4. レポートや論文作成に必要な基本的な知識を身に付ける。

大学生が考える待遇表現とは

そこで授業では、日本語学や社会言語学に基づく学術的な根拠を示しながら、各種演習（様々なシチュエーションにおける文章表現演習、発表、グループワーク等）を行い、日本語によるコミュニケーション能力が身に付けられるよう全 15 回を設計している。毎回、第 1 回目の授業の後には、感想とこの授業で学びたいことを書いてもらっており、学生の多くは「これまで国語が苦手だった」「文章を書くことが苦手」と書きながらも、「正しい日本語を使って、相手を不快にさせない会話ができるようになりたい」「社会に出てから日本語が上手く使えず、敬語も使えていなかったら恥ずかしい」と記している。筆者の授業の受講生の 9 割近くは理工系の学生で、「相手が不快にならない言葉遣い」に興味関心を抱き、数年後に控えた就職や大学院進学を見据え、大学生（学部生）の間に正しい日本語表現やマナーを身に付けておきたいと考える前向きな姿勢が見受けられる。平成 31（2019）年度後学期からは留学生や外国人学生の受講があり、日本人外国人を問わず、正しい日本語表現を身に付けたいという学生のニーズは高い。

文化庁文化庁国語課（2018）『平成 29 年度国語に関する世論調査』では、国語について関心がある点を尋ねている。岐阜大学の学生の年齢に相当する 16～19 歳と 20～29 歳の男女の回答について一部引用し、次の表に示してみた。

表 1 国語に関する関心について

	男性		女性	
	16～19 歳	20～29 歳	16～19 歳	20～29 歳
敬語の使い方	60.7%	60.8%	58.8%	67.6%
日常の言葉遣いや話し方	57.1%	66.7%	73.8%	60.7%

文化庁文化庁国語課（2018）『平成 29 年度国語に関する世論調査』P.7 の表 1 を一部改変・引用

表 1 は、上記の 2 項目を含む 11 項目のなかで、「非常に関心がある」「ある程度関心がある」と回答した割合が 50%以上の項目を取り上げてまとめたものである。16～29 歳の男女では、「敬語の使い方」や「日常の言葉遣いや話し方」に高い関心を示しており、筆者の授業の受講生も同様であることが分かる。

また、文化庁文化庁国語課（2017）『平成 28 年度国語に関する世論調査』で、「コミュニケーション能力は重要か」という問いには、16～19 歳では 98.7%、20 代では 100%が「そう思う」と回答している。また、「きちんとした言葉遣いができないと社会から認めてもらえないという雰囲気を感じるか」という問いには、16～19 歳では 90.8%、20 代では 73.8%が「そう感じる」と回答しており、筆者の授業の受講生の言葉に関する興味や意識とも一致する。

そこで、2019 年度後学期からは全 15 回の授業のうち、2.5～3 回を「待遇表現 1」に充て、そのなかの 1 回弱で敬語を扱っている。学生には、文化審議会答申（2007）「敬語の指針」第 1 章敬語についての考え方で示されている『相互尊重』を基盤とする敬語使用』『自

己表現』としての敬語使用」の2点をおさえたうえで、「敬語は、コミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために欠かせないもの」と提示し、様々な場面や人物に応じた談話例をもとに演習と解説を繰り返し行っている。

そこで本研究では、これまで3回開講した授業において学期末に実施した筆記試験のうち、「待遇表現」の設問4問に着目し、受講生の平均点が低かった2つの設問について、解答状況や誤用の傾向を分析した。第2章では大学生の待遇表現に関する先行研究について、第3章では調査概要、第4章では分析結果、第5章ではまとめを述べていく。

2. 大学生の待遇表現に関する先行研究

大学生の待遇表現に関する先行研究は数多く存在している。そのなかで「敬語」に焦点を当てた研究としては、鈴木(2008)、河・金井(2017)、早野(2017)などが挙げられる。

鈴木(2008)では、学生の日本語能力の現状を把握するために、間違っている敬語を正しい表現に直す記述問題を10問出題し、分析を行っている。学生が修正した解答はバリエーションが多く、誤答や減点対象となったものには2つの傾向があるとし、敬意を表す表現をさけるパターンと、丁寧にしたあまり二重や三重敬語にするパターンがあるとしている。

河・金井(2017)では、大学生(日本語母語話者)の過剰敬語についての意識を知るために、文化庁における「国語に関する世論調査」などをもとに作成した敬語表現24問(二重敬語、敬称、マニュアル敬語など)について、表現として気になるか気にならないか、印象として好印象か悪印象かを、関東在住の大学生を対象にアンケート調査で尋ねている。敬称(患者様、〇〇(企業名)さん)やマニュアル敬語(領収書になります、千円からお預かりします)、(さ)せていただくについては、とりあえず好意的に受け入れるという大学生の進取性を見て取れたと述べている。

早野(2017)では、授業における日本語力チェック5回のうちの2回において、日本人学生と留学生の敬語に対するレディネス²を調査し、日本人学生と留学生がこれまで受けてきた敬語教育を踏まえて分析を行っている。日本人学生と留学生ともに、敬語の使い方の正誤の判断はできるが、場面や状況にあった表現に直すことが困難であると述べている。

これらの先行研究からは、大学生は自分が使用している敬語が正しいか間違っているかの判断はできるが、確証が持てず、とにかく丁寧な表現にするために敬語を何重にも使用するという傾向が読み取れる。

そこで本研究では、同様の傾向や新たな特徴が岐阜大学の学生にも見受けられるかどうかを検証し、今後の授業改善に資するため、これまで実施した筆記試験のデータを用い、分析を行った。

3. 調査概要

3. 1 調査方法

2019年4月から2020年8月までに開講した筆者の授業における過去3回の定期試験（筆記試験）では、「待遇表現」の問題を4問出題している。これまで3回の筆記試験で出題した待遇表現の問題は全て同じもので、学生の解答状況や成績はデータとして蓄積している。なお、出題している問題は、文化審議会答申（2007）「敬語の指針」の「第3章敬語の具体的な場面での敬語の使い方」に掲載されている問題を一部アレンジしたものである。筆記試験は毎回、教科書やプリント、授業ノートの持ち込みは一切不可とし、試験終了後には問題用紙と答案用紙を全て回収している。

3. 2 調査対象の試験問題

待遇表現を使用するにあたり、特に留意しなければならないのは『相互尊重』を基盤とする敬語使用』『自己表現』としての敬語使用の2点である。その際、「タテの人間関係」（上下関係）と「ヨコの人間関係」（親疎関係）も踏まえて、相手や場面に応じた適切な表現を行うことが重要である。そこで、文化審議会答申（2007）に掲載されている全30問の問いのなかから、上記2点に留意しながら、相手の呼び方や能力・意思に関する言及、依頼の仕方に配慮ができていのかどうかを問うことができる次の4問をアレンジして出題している。

表2 定期試験で出題した待遇表現の問題

<p>4. 次の①～④の下線部について、待遇表現を考慮して、適切な表現に直してください。</p> <p>①会議の司会をしている時、1年先輩のAさんに「<u>あなたはどう考えますか</u>」と言ったところ、先輩の顔が少し不機嫌そうになった。</p> <p>②専門について分からないことがあり、先生の研究室に訪問した。分かりやすく教えてくれたので「<u>先生は教え方が上手ですね</u>」と伝えたところ、先生の表情が曇った。</p> <p>③休憩時間になり、共同研究室でコーヒーを淹れることにした。コーヒーが飲みたいかどうか先生に尋ねたいとき、「<u>先生もお飲みになりたいですか</u>」は変な表現のような気がする…。</p> <p>④自席で仕事をしていた時、あまり親しくない同期社員が突然、「<u>これ、お願いします</u>」と言って書類を置いて立ち去った。たとえ同期でも、これは失礼ではないか…と感じた。</p>

この4問を選択したのは、表現の仕方によっては、これまで築いてきた良好な人間関係が崩れる可能性が否めないからである。授業では、大学生の間に、相手を慮った言葉遣いができるようになって欲しいという思いから、待遇表現の定義や概要を説明したあとに、敬語の解説を行っている。敬語は待遇表現の1つであり、様々な場面や状況、相手の立場に応じて適切なことば遣いでコミュニケーションが図れるよう、いくつかの談話例を使用した演習を行い、再度解説を行っている。

3. 3 定期試験の実施期間と受験率

過去3回の定期試験の実施期間と受験率は次のとおりである。

①定期試験実施期間（筆記試験実施日，問題・答案一式は全て試験後に回収）

第1回：2019年8月4日（2019年度前学期定期試験）

第2回：2020年2月4日（2019年度後学期定期試験）

第3回：2020年8月4日（2020年度前学期定期試験）

②解答時間

第1～3回ともに90分間

③受験状況と受験率

定期試験全3回の受験率は，92%である。

表3 定期試験の受験状況と受験率

	2019年度 前学期	2019年度 後学期	2020年度 前学期	合計
登録者数	40	41	41	122人
受験者数	35	41	36	112人
受験率(%)	88%	100%	88%	92%

2019年度後学期は，受験率が100%であった2019年度前学期と2020年度前学期においては受験率が低下したのは，授業時間中に何度も学務情報システム（Campus-G）³で出欠確認を促しているにも関わらず，内規による出席日数不足で筆記試験の受験資格を失った3～4年生が存在するからである。

4. 分析結果

表4は，第3章の表2で提示した4つの設問について，得点別人数と平均点を算出したものである。

①～④の4つの設問は1問につき配点は2点で，それぞれ平均点は1.23～1.29点となっている。今回は紙幅の都合により，平均点が若干低い設問②と③の2つの設問に対する誤答例を取り上げて分析を進めていく。

4. 1 設問②「先生は教え方が上手ですね」の解答状況

設問②は，目上の人に対する「褒め」の表現については是非を問うたものである。受講生122人のうち55人（45.1%）が誤答（0点）であった。表5は，誤答として多かった文例上位

大学生が考える待遇表現とは

5つとそれぞれの人数を示したものである。

表 4 待遇表現の設問別得点分布と平均点

設問	得点別人数・割合 (%)			未履修 人数・割 合 (%)	平均 点
	2点	1点	0点		
①1年先輩のAさんに「あなたはどうか考えますか」と言ったところ、先輩の顔が少し不機嫌そうになった。	75人 (61.5%)	9人 (7.4%)	28人 (23.0%)	10人 (8.2%)	1.29
②(先生が)分かりやすく教えてくれたので「先生は教え方が上手ですね」と伝えたところ、先生の表情が曇った。	40人 (32.8%)	17人 (14.0%)	55人 (45.1%)	10人 (8.2%)	1.24
③コーヒーが飲みたいかどうか先生に尋ねたいとき、「先生もお飲みになりたいですか」は変な表現のような気がする …。	14人 (11.5%)	91人 (74.6%)	7人 (5.74%)	10人 (8.2%)	1.23
④自席で仕事をしていた時、あまり親しくない同期社員が突然、「これ、お願いします」と言って書類を置いて立ち去った。	102人 (83.6%)	3人 (2.46%)	7人 (5.74%)	10人 (8.2%)	1.27

表 5 設問②の誤答例と解答件数

順位	誤答例	解答件数 (人)
1	先生は教え方がお上手ですね	14
2	先生の教え方はとても分かりやすい (or わかりやすい) です	5
3	先生は教え方が上手でいらっしゃるんですね	4
3	無解答	4
4	先生の教え方は大変分かりやすいです	2
4	先生の教え方は分かりやすいです	2
5	その他	24
	合計	55

ここに挙げている誤答例に共通しているのは、この設問を出題した意図が理解できておらず、設問の文章にほとんど手を入れることなく、先生の教え方を褒めていることである。設問文中の「上手」に「お」をつけて「お上手」としたり、「とても」や「大変」という程度副詞を用いて「とても分かりやすい」「大変分かりやすい」と表現を改めることで、先生の教え方に関して、丁寧で失礼がない言い方で褒めることができればよいと考えているのだろう。また、誤答例の「その他」では、24人が24通りの解答をしており、鈴木(2008)と同様、本研究においても、学生が修正した解答はバラエティに富んでいるということが明らかになった。

しかし、授業では、相手の能力や技術について言及しないように触れ、鈴木(1989)(1997)で述べられている「私的領域」について解説をしている。聞き手と話し手の領域は区分され

ており、丁寧さを保つためには、聞き手の私的領域（欲求・願望・意志・感情・感覚）に踏み込むことを避け、相手が不快に感じないように配慮する必要があることを、あるシチュエーション（友人に第一志望の大学やセンター試験の点数を聞かれた時）を想定させ、その時に自分はどのような気持ちになるかを考えさせて、再度解説を繰り返した。

さらに、令和2（2020）年度前学期の授業では、前半4回がオンライン授業となったこともあり、鈴木（1997）の図をスライドに引用し、授業後には岐阜大学の学習支援システム（AIMS-Gifu）⁴にアップロードして、学生が好きな時間に復習できるようにしている。

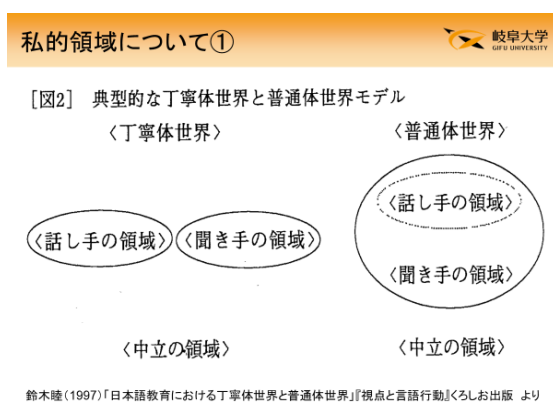


図1 私的領域について①

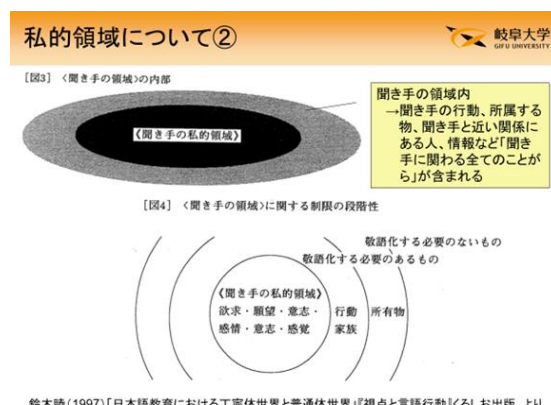


図2 私的領域について②

今回、学生に提示した鈴木（1989）（1997）以外にも、森山（2003）では、「敬意を感じる相手には保全すべき領域があり、むやみに立ち入ってはならない」という敬語の基底にある考え方を示している。特に、目上の人能力に言及するのは、その人にとってあまり触れてほしくない問題で、注意が必要であるとし、聞き手への評価、聞き手の個人的な感情、聞き手にとって必要なこと、能力などを話題にすると、聞き手の領域にふみこむことになり、敬意を表した表現とは受け取られなくなる可能性が出てくると述べられている。

また、山田（2013）では、学生の授業参加の感想（①A先生の掲示物は、内容が豊富でよかった。②B先生の授業を見せてもらったが、特に、黒板の使い方がお上手だった）を例に、プラス評価のことばも目上の人を褒めた場合には「余計な一言」になるとし、日本語では先生や上司という目上の人職業を行ううえで当然持っている技量について褒めてはいけないルールがあると述べている。

今回誤答であった学生も含め、授業後に感想を書いてもらうと「（〇〇先生の）〇〇の説明が分かりやすかった」と記入する学生が多い。「先生の〇〇の教え方はよかったです」「今日の授業は分かりやすかったです」「〇〇〇セミナーよりも分かりやすかったです」と笑顔で話しかけてくる学生もいる。彼らには全く悪気がなく、むしろ、「先生の分かりやすい教え方のおかげで、授業が理解できてうれしい」という素直な気持ちを先生に伝えたい「優しさ」「親しさ」を表現することに重きを置いているのではないかと考える。しかし、教員と

しては複雑な気持ちになるのも事実である。文化審議会答申（2007）でも、褒めたい気持ちを表明すること自体に問題があるわけではないが、評価する立場にない者が能力や技術について褒めることは適切な表現だとは言えないとしている。そこで、蒲谷（2013）では、「教え方に触れるのではなく教えてもらったこと自体に対する感謝の気持ちを伝えるほうが、よりよいコミュニケーションにつながる」と述べている。しかし昨今は、多くの高等学校や大学で、生徒や学生に担当教員の授業評価をさせている現状もあり、彼らには、「教え方」というたった1つの単語が、山田（2013）で述べられている「余計な一言」になることが理解できないのかも知れない。「先生の教え方がよかったから、私は授業を理解することができてうれしかった」という気持ちを伝えることで、先生も喜んでくれるに違いないと期待し、敬語も使用して話しかけたにも関わらず、なぜ気分を害するのかが理解できないのであろう。授業で時間をかけて事例を挙げて解説をしていますが、このような回答になる背景には、現在の若者が生活する社会環境（授業を教えてもらうという“恩恵”を受ける側である学生が教員の授業評価を行うこと等）も関与しているのではないかと考えられる。滝浦（2013）では、かつての日本社会では「目上をほめてはいけない」という文化的規範があったが、あるテレビ番組に視聴者参加した人の発話（麻婆豆腐がお上手な〇〇〇さんに教わりたいたいと思って……）を例に挙げ、現在の日本では上位者をほめることに抵抗がない人が増えているのは確実だろうと述べている。

最近公表された文化庁（2020）「令和元年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」では、敬語に関する言葉遣いに対する印象として8つの言い方について気になるかどうかを尋ねており、「先生は講義がお上手ですね」という言い方では、16～19歳で21.6%、20代で20.4%、30代で39.5%、40代で38.4%、50代で31.9%が「気になる」と回答し、20代以下では気になる割合が他の年代よりもかなり低くなっている。全体としては、前回（平成10年度）は27.5%、今回（令和元年度）は32.4%が「気になる」と回答しており、前回より4.9%増加しているが、他の7つの言い方に比べると、全年代を通して気になる割合が最も低い。

以上のことから、現在、目上の人を褒めるといふ発話に関しては、大学生のみならず、どの年代においてもほぼ抵抗なく行われていることが明らかになった。皮肉を込めて褒められていることが分かる場合を除き、褒められて嫌な気持ちになることは少なく、「相手を褒める＝相手が喜んでくれる」と考えるのが大多数であろう。そのため、相手が目上であっても褒めるといふ行為に罪悪感はなく、丁寧語の「です」「ます」を使用することで無難にタテの関係（上下関係）を維持しながら、相手の行為を称えて喜んでもらうことでヨコの関係（親疎関係）を深め、心理的距離を縮めたいという気持ちが強いあまり、無意識に相手が踏み込んでほしくない領域（能力、技量、家族構成、収入等）に触れてしまうのだと考える。昨今は、SNSによる単語や短文での自己中心的なやりとりが増えていることもあり、互いに触れられてもよい領域や距離感を推測しながら、コミュニケーションを図ることがより困難になっていることも要因の1つとして挙げられる。しかし、熊井（2003）で述べられ

ているように、待遇表現は円滑なコミュニケーションを行うための対人的配慮を表す言葉で、どの言葉を選択するかは最終的には話し手の意図によるが、そこに話し手の話題主や聞き手、場面などに対する評価がはたらいっている。そのため、自分では適切な表現だと判断して発話しても、相手には不快な表現に感じられ、たった1回の発話でこれまで築いてきた人間関係が崩れてしまう恐れもある。正しく敬語が使用できた発話でも、相手にとって嫌みに聞こえた場合は、慇懃無礼と受け取られてしまう。1度発せられた言葉はその場で消えてしまうが、相手の心には残る。SNSや各種文書での表現は、相手の心に残るだけでなく、インターネット上や紙面にデータとしても残ってしまう。

今後の授業においては、これらの点をさらに踏まえ、岐阜大学の学生が相手に配慮した表現で良好な人間関係が構築できるよう、ペアワークやグループワークを活用しながら、自分自身が発する言葉を見つめて改める機会を提供する必要があると感じている。

4. 2 設問③「先生もお飲みになりたいですか」の解答状況

設問③は、目上の人に対して意思や願望を直接尋ねることの是非と、取り立て助詞の使い方について問うたものである。受講生122人のうち7人(5.74%)の学生が誤答(0点)で、91人(74.6%)の学生が許容可能な解答(1点)であった。表6は誤答例とその人数内訳である。

表6 設問③の誤答例と解答件数

順位	誤答例	解答件数 (人)
1	先生もお飲みになられますか	2
2	先生はコーヒーをいただきますか	1
2	先生もお飲みなさいますか	1
2	先生もお召しになりますか	1
2	コーヒーはお飲みになさるでしょうか	1
2	先生、私がコーヒーを頂いてもよろしいでしょうか	1
合計		7

表6に示す誤答は、敬語の使い方自体を理解していないものである。そのうちの1つは、ある学部留学生として在籍していた学生(3年生男性)の解答である。

表7 設問③の許容可能な解答例と解答件数

順位	許容可能な解答例	解答件数 (人)
1	先生もお飲みになりますか	34
2	先生も召し上がりますか	11
3	先生もコーヒーをお飲みになりますか	5

大学生が考える待遇表現とは

3	先生も飲まれますか	5
4	先生もコーヒーいかがですか	4
5	先生もいかがですか	3
	その他	29
合計		91

上に示す表 7 は、許容可能な解答例とそれぞれの人数である。

表 7 の許容可能な解答例で明らかなのは、敬語の形としては正解または許容できるものであるが、問題文中にある取り立て助詞の「も」をそのまま使用し、「先生も」と表現していることである。目上や年上の人との会話では敬語の使用に気を配ることは勿論、「待遇表現」の視点で話すことが大事であると伝えている。そこで授業では、親友に「〇〇さん“も”一緒に映画に行こうよ」と誘われる場合と、「〇〇さん、一緒に映画に行こうよ」と誘われた場合を事例に挙げ、この 2 パターンで誘われた時、自分の気持ちに違いがあるのかどうかを考えさせている。その後、取り立て助詞「も」を使うことで「映画に誘ったのは〇〇さんだけではない。〇〇さん以外の人にも誘っている」ということを暗示し、誘われた相手が「〇〇さん“も”と言って誘うということは、私は“ついで”に誘われた存在なのだろうか」と不快に感じる場合があるため、助詞の使い方にも配慮する必要があると伝えている。今回、これらの解答をした学生は、「お飲みになりたいですか」の部分における敬語の使い方と気をとられ、取り立て助詞の「も」の扱いにまで配慮が行き届かなかったのだと思われる。

しかし、解答を見ていてうれしいことがあった。先生という目上の人に対して「(コーヒーを) 飲みたいですか」「(コーヒー) が欲しいですか」という意思や願望を直接尋ねる受講生が 1 人も見受けられなかったことである。以上のことから、岐阜大学の学生はある程度、良識を持った対応ができると判断してよいだろう。

5. まとめ

今回、これまで 3 回開講した授業において学期末に実施した筆記試験の「待遇表現」の設問に着目し、受講生の平均点が低かった 2 つの設問について、解答状況や誤用の傾向を分析した。

待遇表現の 1 つである敬語使用に関しては、鈴木 (2008) で述べられている「敬意を表す表現をさける」というよりも、逆に相手に失礼がないようにと丁寧に話そうとするあまり気を遣い過ぎて、敬語を二重三重に使用してしまう傾向にあった。文化庁文化庁国語課 (2017) で、敬語の使用によるマイナスの影響を尋ねたところ、16~19 歳では 75.0%、20~29 歳では 72.1%がマイナスの影響がないと回答していることから、筆者の授業の受講生を含む若者の多くが敬語の必要性を重んじていることは明らかである。これまで 3 回実施した筆記試験では、敬語を多用した誤答や珍答 (先生は上手に教えなされます、先生は人

への伝え方が達者でいられます、先生は教え方が卓越していらっしゃるね等)が見受けられ、採点しながら思わず苦笑いをしてしまうことがあった。しかしそれらの解答は、若者である学生が、目上や年上の相手に対する言葉遣いに配慮したいあまり、敬語の使い方に試行錯誤している結果であると捉えている。

様々な場面や相手に配慮できるかどうかに関しては、早野(2017)でも指摘されているように、敬語の使い方の正誤の判断はできても、場面や状況、相手の立場に沿った適切な表現に直すことが若干困難であることが分かった。相手との上下関係だけではなく親疎関係も加わると、敬語の使用を重視した方がよいのか、それとも親疎を重視して丁寧体と普通体を交えて会話してもよいのかなど判断に迷い、一生懸命考えた結果、苦笑いするような解答になってしまうのではないかと考える。過去3回の試験において無解答の学生は、設問②で4人、設問③で0人であることから、極めて真面目に適切な表現を考えている姿勢が伺える。

そのため、今後の授業では、学生のこれらの弱点を克服するために、自分や相手が発する言葉や敬語の使い方だけに気を配るのではなく、さらに、ノンバーバルコミュニケーションも意識した発話が無理なくできるよう、様々な場面や相手に応じた適切な表現で会話をする時間を増やす必要があると考えている。

最後に、今回は筆記試験の待遇表現の問題に着目した分析であったが、次回は今学期(2020年度前学期)のオンライン授業における学生とのメールのやりとりについて、書き方の指導前と指導後でメールの書式設定や文章表現に違いが見られるか(相手が不快に感じる文章表現に気づいて修正できたかどうかなど)を比較・分析したい。その結果を学生に提示することで、顔が見えない相手に配慮した適切な文章表現を考える機会を与え、たった1つの言葉で人間関係を失うことがないように気づきを得て欲しいと願っている。

【注】

- 1) 多くの研究者が待遇表現の定義が行っており、学生にはそのいくつかを紹介している。筆者は、文化庁HP「第20期国語審議会(1995) 新しい時代に応じた国語施策について(審議経過報告) I 言葉遣いに関する事」の「3 敬語の問題(1) 現代の敬語」に記載されている定義に基づいて、待遇表現の授業を実施している。
- 2) 早野(2017)では、レディネスを「目標言語の能力、つまり既習の能力という意味で用いる」としている。
- 3) 学務情報システム(Campus-G)とは、学生が履修登録や成績確認、出欠状況の確認などを行うシステムのことである。
- 4) 学習支援システム(AIMS-Gifu)とは、Web(e-Learning)を利用して岐阜大学の学生の学習を支援するシステムのことである。いつでもどこからでもアクセス可能で、自宅等での学習を支援している。

【参考文献】

- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 熊井浩子 (2003) 「第 2 章『待遇表現』の諸側面と、その広がり—狭くとらえた敬語、広くとらえた敬語—」『朝倉日本語講座 8 敬語』 朝倉書店
- 鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」『日本語学』 第 8 巻第 2 号
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』 くろしお出版
- 鈴木裕子 (2008) 「大学生の日本語能力の現状・各論 (敬語・書き順・語彙・表現) —豊橋技術科学大学生の場合」『雲雀野』 第 30 号
- 滝浦真人 (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店
- 河正一・金井勇人 (2017) 「過剰敬語の規範性と印象について—大学生への意識調査から—」 埼玉大学日本語教育センター紀要 11 巻
- 早野香代 (2017) 「大学における敬語のニーズ—日本人学生と留学生のレディネス分析からの考察—」 三重大学高等教育研究 第 23 号
- 文化審議会答申 (2007) 「敬語の指針」 文化庁 HP
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf
2020.08.28 アクセス
- 文化庁 (2016) 「平成 27 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」 文化庁 HP
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h27_chosa_kekka.pdf 2020.08.26 アクセス
- 文化庁 (2020) 「令和元年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」 文化庁 HP
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/92531901_01.pdf 2020.09.29 アクセス
- 文化庁文化部国語課 (2017) 『世論調査報告書 平成 28 年度国語に関する世論調査〔平成 29 年度 2 月調査〕』 文化庁文化部国語課
- 文化庁文化部国語課 (2018) 『世論調査報告書 平成 29 年度国語に関する世論調査〔平成 30 年度 2 月調査〕』 文化庁文化部国語課
- 森山卓郎 (2003) 『コミュニケーション力をみがく 日本語表現の戦略』 NHK ブックス
- 山田敏弘 (2013) 『その一言が余計です。—日本語の「正しさ」を問う』 ちくま新書

University Students' Use of Attitudinal Expressions An Analysis and Discussion Based on Answers on Written Examinations

Eriko Kiyoshima

Organization for Promotion of Higher Education and Student Support,
Gifu University

Abstract

Since the first semester of AY 2019, we have offered a university-wide general education humanities course called “Theory of Japanese Expressions” that teaches practical Japanese expressions. Particular emphasis is placed on the acquisition and explanations of “attitudinal expressions” (including Japanese honorifics). In this study, we analysed and examined the status of student acquisition and trends in wrong answers on the past three written examinations. Regarding Japanese honorifics, the results show that the students had a tendency to use honorifics consistently to avoid appearing rude to others. Moreover, regarding their situational use of honorifics, the results show that they could determine the proper use of honorifics and recognize incorrect usage, but it was difficult for them to select the appropriate expression depending on the scene, circumstances, and the other person’s situation. In order to improve student performance, we believe that the time spent on exercises should be increased.

Key words: Attitudinal expression, Honorific, Written examination, Error analysis,
University student